



TITLE:

佐波宣平先生の学問と生涯

AUTHOR(S):

山田, 浩之

CITATION:

山田, 浩之. 佐波宣平先生の学問と生涯. 経済論叢 1968, 101(5): 490-496

ISSUE DATE:

1968-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133271>

RIGHT:

經濟論叢

第101卷 第5号

哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

ミュール型紡績工場	堀 江 英 一	1
部門間の連関構造	山 田 浩 之 井 原 健 雄	23
原価管理思考としての変動予算概念	野 村 秀 和	43
低開発国開発計画における技術選択	名 畑 恒	64

記 事

佐波教授逝く

追悼講演（山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二）

追 憶 談（葛城照三 安間進）

故佐波宣平教授自作年譜

昭和43年5月

京 都 大 学 經 済 学 会

追悼講演

佐波宣平先生の学問と生涯

山 田 浩 之

故佐波先生の学問と生涯についてお話したいと思いますが、先生の学問については後によりくわしく論ぜられることになっておりますので、私は先生の生涯に重点をおいて話をすすめたいと思います。

まず、先生の生涯について時期区分をしておきたいと思います。先生の生涯は大きく分けますと、3つの時期に分かれると思います。

第1の時期は、明治38年に誕生されてから昭和5年3月に京都帝国大学を卒業されるまでの25年間であります。第2の時期は、同年4月に大学院に入られ、小島昌太郎教授の指導の下に学問の道を歩みはじめられてから、太平洋戦争を中にはさんで、昭和26年7月に「心筋梗塞」で倒れられるまでの21年間であります。第3の時期は、この時から今年2月29日に亡くなられるまでの、相次いで襲いくる大病とたたかいながら新しい研究のために絶えず闘志を燃やしておられた時期であります。

さて、先生は明治38年1月16日、山口県の宮大工の家に8人兄弟の6男として生まれておられます。1つには兄弟が多かったせいもありましょうが、それよりも、先生のお父さまが建てられた神社やお寺の中で、時にその建築費を支払うことができないものがあつたために、たいへん貧乏をされたとのこと。そのために、小学校6年を終っても、すぐに中学校へ行くことができなくて、高等科に2年間行かれ、その後、徳山の海軍煉炭所に製図職工見習として勤務されることになります。

その頃のことを先生はよく私たちに話されましたが、勉強がしたくてたまらないのにそれができなかったことが非常に無念だったそうです。後年の先生は勉強できるということが嬉しくてたまらない御様子で、ご自分でも昨年の春に行ないました先生を囲む座談会で、「勉強のできる毎日毎日の自分がありがとうでありがとうでなりませんのすわ。

……少年のころ、勉強がしたくてたまらんに家が貧乏で勉強ができなかった。たいへん悲しかった。それが今では朝から晩まで勉強できるのですからね。勉強のよくできる学生といっしょになって勉強がやれるというのは実際、私にとって大きな感激ですなあ。」とおっしゃっておられますが、この少年時代に勉強できなかったことから、勉強とか学問とかに対する飢渴感が生まれて、その飢渴感が先生の学問に対する激しい意欲となって表れたのだ、と私は考えております。

職工見習を2年間つとめられた時、先生の郷里の隣の村に下松工業学校が創設されることになり、先生は向学の心をおさえることができず、大正10年4月その第1期生として入学されることになります。これが学者としての佐波先生が誕生する発端であり、第1の時期の前半と後半を分ける里程碑となります。といいますのは、この工業学校の教頭に楠田鎮雄という先生がおいでになり、この楠田先生が佐波先生の才能に注目されて、佐波先生の人生に決定的な転換をもたらす大きな感化を与えられたからであります。

楠田先生というのは、京都帝国大学の文学部を卒業されてから、浜田耕作教授の下で助手をされて学問の道を歩んでおられたのですが、不幸にして下あごの骨髄炎にかかれ、当時の医学では不治ということで、全く希望を失って郷里へ帰られたのです。ところが、郷里へ帰ってみると病気の進行が止まってしまった。しかし、再び大学へは帰れない。やむなく中学校の先生をされることになったその時に佐波先生にめぐり会われたわけです。

楠田先生は佐波先生の文才にとくに注目され、「工業学校を卒業して会社の職工となってもつまらぬ。工業学校は中退して中学校に転入学しなさい。そして大学の文科に入って、俺のやれなかったことをやってほしい。俺の仇をとってほしい。」とすすめられたのだそうです。この言葉が少年である佐波先生に決定的な影響を与え、この言葉によって先生のその後の人生の大体の方向がきまった、といえるようであります。こうして、佐波先生は、楠田先生の命令——といってよいと思いますが——に従って、山口の鴻城中学を経て、山口高等学校の文科に進まれることになります。

ところで、山口高校へ進まれるのとほぼ同じ時に、先生は「佐波」の家へ養子に行かれます。それまでは「岩瀬」という姓だったわけですが、その時の事情をここで、一言のべておく必要があります。それは、佐波先生は養子というのが嫌いだったそうですが、中学4年の時に一度ことわった養子の話を、1年後に、佐波の家の主人が胃癌であると1月ももたない、それで何とか跡取りを決めて死にたい、もう一度考え直してくれないか、といわれて感動して、両親には事後承諾のような形で入籍された、という話であります。その養父は、先生が入籍された直後に62歳で亡くなられたそうですが、佐波先生がほぼ同じ年に同じ病気で亡くられるという事実には、私は深い悲しみを抱かずにおられませ

ん。

この頃の佐波先生は典型的な文学青年であったと思われます。小学校の6年生の頃から作文や俳句が好きで、雑誌にも盛んに投稿しておられ、さらに楠田先生に文才を認められて、「文士になれ」とすすめられて高等学校の文科に入られたわけですから、高等学校で友人たちと同人芸雑誌を発行されるようになったのも自然の成行であったに違いありません。しかし、高等学校から大学へ進まれるときには経済学部を選ばれたのですから、楠田先生が指示されたコースから少し外れたことになります。文学部では飯が食えないのではないかというのが、経済学部をえらばれた最大の理由だったそうですが、経済学部へ入ったと聞いて、楠田先生は「おれは、三井・三菱の番頭にするために、お前を仕込んだのではない。」とたいへん怒られたそうです。しかし、いくつかの僥倖といえますが偶然といえますが、そういったものが重なって、幸いにして、佐波先生は学問の道へ進まれることになります。

その第1のきっかけは、文学とともに歴史の好きであった佐波先生は、大学2回生のときに「明治・大正文化史」というテーマの懸賞論文に応募されたことから生じます。この論文は2等になったのですが、その時の審査員に現在本学の名誉教授であられる本庄榮治郎先生がおられて、本庄先生がこの論文に注目されます。当時、経済学部の先生方が中心となって大阪市史の編纂をしておられましたので、本庄先生が小島昌太郎先生に、佐波というよくできる学生がいるが、大阪市史の仕事を手伝わしたらどうか、とすすめられて、小島先生が担当しておられた交通・海運部門の市史のお手伝いをされることになったわけです。これが佐波先生と小島先生との出会いであり、また交通・海運論を勉強される起縁ともなったのであります。

第2のきっかけは、この大阪市史で大阪商船株式会社の創立事情を研究されることになった佐波先生は、同社に興味をもたれて、卒業に際して同社の就職試験を受けられたのですが、幸いにして——と私たちは思っているのですが——不合格となったことです。昭和5年つまり1930年の卒業ですから、当時は世界大恐慌のさ中であり、非常に就職難の時代でありました。佐波先生の不合格には、そのことが大きく作用していると思われますが、先生の話を書きますと、それだけが原因ではなかったようです。といいますのは、先生は結婚されるまで全然身なりをかまわれなかった。2ヶ月に一度位しか散髪にも行かず、ヒゲもそられなかった。そのため「オンケル」というあだ名がついていたそうですが、就職試験の当日も不精ヒゲを生やしたままの平生のなりで行かれたわけです。試験場で友人から、「今日もヒゲをそらないでできたのか」といわれ、先生はびっくりしたそうです。

ともかく就職試験の結果は不首尾で、小島先生と相談して大学院へ進まれることにな

ります。そして大学院での最初の仕事は、大阪商船の創立事情を明らかにした処女論文——「大阪を中心とする内海航路の海運同盟の変遷」（昭和6年1月）——ということになります。

以上が経済学者佐波先生の生誕事情でありまして、ここから第2の時期の学者としての先生の生涯がはじまります。ただ、佐波先生の学問については後にお話になる方がおられますので、私は要点だけにとどめたいと思います。

昭和5年4月に大学院に入られた先生は、当時小島昌太郎先生の研究室から発刊された雑誌『経営と経済』の編集者として活躍される一方、世界海運の現状分析を行なっておられます。大学院生活の4年間を経て、昭和9年3月に先生は経済学部の講師に就任されますが、これを転機として先生の研究は保険論にむかうことになります。そして文学や歴史とともに数学が好きであった先生は、歴史と数学が同時にやれる保険論に非常に興味をおぼえられて、しばらくは保険論の研究に没頭されますが、この中から生みだされたのが、先生の研究業績のうち主要なものとして自他ともに認められている4大業績のうちの第1の業績、『再保険の発展』（昭和14年7月刊）であります。

この書物が出版されてからしばらくして、先生の研究は再び海運に移り、とくに海運政策についてすぐれた論文を次々に発表されますが、この頃海運研究が戦後になって、先生の最も重要な業績といわれる『海運理論体系』（24年1月）となって実を結ぶわけです。

ここで一言申しておきたいのは、先生の研究の歩みにおいて戦争による断絶や停滞が全く見られず、戦前・戦中の研究がそのまま連続的に戦後の研究に引きつがれていることです。昭和16年頃からはじまる先生海運政策研究はイギリス・アメリカの海運政策を主たる対象とするものでしたが、その研究態度はきわめて客観的・科学的なものであり、今日の学界においてもそのまま通用するだけでなく、高く評価されるものばかりであります。

他方、この頃からすでに、先生は数理経済学の勉強をはじめておられ、勤労働員のあい間にもひそかに学生に数学を教えておられるのです。このような戦争中における数理経済学の研究は、戦争が終わると直ちに、数理経済学を交通論に導入したパイオニア・ワークとして現在の交通経済論の出発点となった『交通概論』（23年2月刊）として結実することになります。

こうして、戦争が終了すると、生活的には最も苦しい時期であったに違いない戦後の約5年間の間に、せきを切ったように、先生の主著が矢つぎ早やに出版されることになります。昭和23年に『交通概論』、24年に『海運理論体系』、26年には歴史と数学をミックスしたユニークな保険論の教科書『保険学講案』が刊行されます。しかもこの間に交

通論の入門書『交通学大要』(24年9月)、随筆集『海運研究者の悲哀』(26年12月)を書いておられるのですから、その仕事ぶりはまさに超人的といえるのではないのでしょうか。このうち、『交通概論』は先生の4大業績のうちの第2の業績であり、『海運理論体系』は第3の業績であります。この書物によって、先生は昭和25年に経済学博士の学位を受けられておりますし、またこれらの研究業績全体に対して、昭和28年に第1回の交通文化賞が授与されることになります。

ともかく、この時期は学者としての佐波先生の最高頂の時期であり、戦前からの地道な研究が華やかに開花した時期でありました。しかし、このような激しい仕事ぶり、精励ぶりは、当時の食糧事情の悪さと相いまって、先生の体を損わずにはおかなかったのです。26年7月、先生は神戸で開かれた学会の席上、「心筋梗塞」の発作で突然に倒れたのです。そして、これからの17年間は次々と難病・業病に襲われ、病氣との、また学問との苦闘がつづくのです。その間の先生のはげしい闘志と努力は、まことに英雄的であった、といってよいと思います。

「心筋梗塞」の発作は、これから約5年間ひんびんとして起るのです。しかも少し元気になられると、病床で『交通概論』を書き直すという仕事をされ、それは『改版交通概論』(29年11月)として面目を一新して出版されます。そして、発作が生じなくなった32年頃からは、新たな研究をはじめようとして、本格的な勉強をはじめられます。当時、先生は数理経済学の勉強をやり直そうか、それとも歴史を中心に研究を進めようかと迷っておられたようでしたが、結局先生はその両方をやられたのです。歴史研究に対する欲望は、海事用語の考証をすることによって満たそうとされました。そしてそれは現在、龍大な原稿として残っております。

他方、数理経済学の研究は、Allen, R. G. D. の *Mathematical Economics* (1957)の研究を皮切りに、経済動学と線型経済学の両方について、新進の研究者のような態度で取組まれました。そしてその成果はまず「C.I.F. 価格の巨視分析」として実を結んだのです。これが先生の4大業績の第4の業績となります。このテーマの追論が昨年の退官記念講義において発表されたことは記憶に新しいことです。これと時を同じくして、経済動学を海運論に適用した『海運動学入門』(37年1月)が第2の成果として完成をみます。しかし、これらの業績がほぼ完成をみた36年10月、香川大学で開かれていた日本保険学会の出席中に、「胃潰瘍」で倒れたのです。

この時から先生は1年おきに大病に襲われるのです。38年は「網膜剥離」で眼底の手術を受けられます。そして40年が「胃癌」でした。40年からは毎年大手術を受けられねばなりません。しかし「胃癌」が発見される前、40年の1月16日に還暦を迎えられた先生は、自らの還暦を記念して、永年構想を練り材料を集めておられた『弾力性経済学』

の執筆を思いたたれ、執筆を開始されたのです。その原稿もほぼ完成した同年の8月に先生は「胃癌」の手術を受けられました。この書物は門下生とセミナーの学生によって完成・出版され、数理経済学の研究を再開されてからの先生の第3の業績となります。

昭和40年夏、「胃癌」が発見されてからの先生の生活は壮烈という形容がピッタリの生活でした。先生はもともと生命力の旺盛な人でした。学生時代に、「オンケル」以外にも「肩幅」というあだ名をもっておられたほど広い立派な肩幅をもっておられた人です。そして旺盛な生命力と火のような闘志をもって学問に対しても病気に對しても立ちむかわれたのであります。先生は生きるためにはどんな努力でもされました。どんな大手術をもいとわれませんでした。先生はがまん強い人でありましたから、痛いとか苦しいとかいって家族の方を困らせることはありませんでした。そして事態を直視し、科学としての医学を信じて、医者と言われる通りを実行されたのです。その態度は静かではありましたが、生に対する執着力はまことにはげしいものがあつたと思います。ただ、最初の胃癌の手術のあとで「スモン病」という病気にかかれた時は、かなりの苛立ちを示されました。「スモン病」は医学的には原因も治療法も定説がなく、その上神経をたえずさいなむわけですから、先生にとってどんなに苦痛だったことでしょう。41年の1月だったと思いますが、「山田君、私が自殺しても決して笑ってくれるなよ」と言われたことがあります。しかし、その夏には「スモン病」による精神的・肉体的苦痛をも克服されかけておりました。がその時には「肝臓癌」の手術を受けられねばならなかったのです。しかし、先生は手術ができることをむしろ喜んでおられました。手術ができるなら、まだ生きることができる、と先生は考えておられたのです。その頃だったと思いますが、先生はノートの端にこう書かれました。

Das Leben ist und bleibt schön.

「生きるということは、何と言っても、素晴らしいことだ」

死と直面しながら、先生はこの言葉をたえず心の中で反復しておられたのだと思います。

しかし、昨年11月はじめ、先生のお宅の近くの路上で奥様とご一緒の先生とお会いした時、「山田君、肝臓のところに大福餅みたいなものができてきた。今日気がついたところだ。さわってみて下さい。」とおっしゃって、路上であるに拘らず、私の手を先生のお腹へもっていかれました。あの時の先生のお腹の固いゴリゴリしたものの感触を私は忘れることができません。そして、もうだめではないかという予感ともっと生きたいという願望の交錯した先生の苦悩にみちたお顔を忘れることができません。その後で、先生は退官講義の予定を繰り上げられたのです。そして、末のお嬢さんの結婚をみとどけ、この1月8日に手術のできることを期待して入院されたのです。しかし、手術が不

可能だと知られた時の先生は、もう死の近いことを覚悟して、「山田君、もうさっぱりした気持です。信仰がなくても落ち着いて死ねますよ。」とおっしゃったのでした。

先生は飾らない、素朴な人柄でした。ご自分と学問に対してはきびしい人でしたが、私たちにはやさしい、愛情の深い人でした。そして何よりも節操を尊ぶ人でした。ご自分の思想に対しても、奥様に対しても節操を貫ねぎ通されたと思います。

先生が常々愛誦されていた言葉に、Longfellow の

Life is real. Life is earnest!

という言葉があります。先生の生涯はまさに “Life is real. Life is earnest.” という言葉そのままであったと思います。

(昭和43年3月12日)